國學院大學学術情報リポジトリ

〔座談会〕「外国語を使う」とは何か：習得、教育、そして可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新倉, 真矢子, 黒澤, 直道, 藤野, 敬介, 小池, 寿子, スピアーズ, スコット, Niikura, Mayako, Kurosawa, Naomichi, Fujino, Keisuke, Koike, Hisako, Spears, Scott メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000466

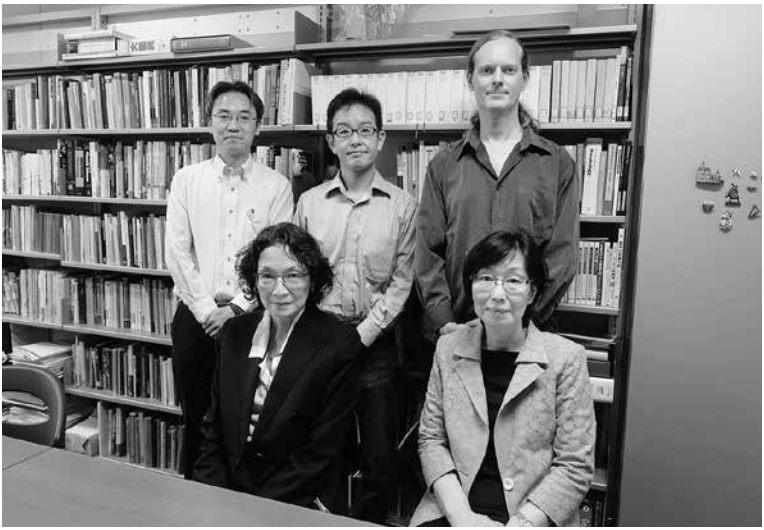
〔座談会〕

「外国語を使う」とは何か

—習得、教育、そして可能性—

◆國學院大學渋谷キャンパス
若木タワー十三階　一三一四研究室
◆平成三十年六月二十一日（木）午後二時

新倉真矢子（本学外国語文化学科教授）
黒澤　直道（本学外国語文化学科教授）
藤野　敬介（本学外国語文化学科准教授）
小池　寿子（本学哲学科教授）
司会　スピアーズ・スコット
（本学外国語文化学科准教授）



【スピアーズ】　今日は、特に日本語以外の言語を中心に、先生方がどのように学んできたのかということや、どのように使うのか、何が大切なのか、何がおもしろいのか、そしてそれらから見えてくるものについて、お話を伺っていきたいと思います。

まずは、日本語以外の言語について、若いときにどのような体験や経験があったのかお話しいただきたいと思います。

【新倉】　私は父の仕事の関係で二度渡独し、ベルリンで幼稚園から小学校四年生まで過ごし、ハンブルクの高校と大学に半期通いました。合計すると約十年になります。ベルリンは幼少期でもあったため、友達や学校を通して無理なくことばを身につけることができました。その後日本の小学校と中学校を卒業してからハンブルクのギムナジウム（中高一貫校）に編入しました。このときはそれまでに培った日常生活のことばだけでは足りず、学校の教科を理解するためにドイツ語を学習しました。一回目は自然な習得であったのに対し、二回目はドイツ語を自分で学習して身につけたというような経験があります。

【藤野】　私は英語ですけれども、高校二年生の秋からカナダに留学して、そのまま高校を卒業して現地の大学に行って、大学を卒業した後に日本に戻ってきて、日本の大学院に入った後、奨学金をもらって今度はアメリカの大学院に行って、一年過ごして戻ってきました。ですから、カナダは合計で七年間、アメリカが一年間、そんな感じです。

【スピアーズ】　カナダに行くからには、フランス語にも触れることはなかったですか？

【藤野】　フランス語に関しては、一応大学で一年半ぐらいは教養の課程で勉強しましたが、カナダもどこの地域に行くかによって、フランス語へのプレッシャーというのは違います。僕がいたのはバンクーバーのある西海岸の方でしたので、カナダ人学生でも、将来公務員になる等フランス語を使う職業につくという目標がある学生でないと、基本的にはフランス語をやらないのです。東海岸の方、特にケベックのあたりに行くと、当然フランス語圏ですのでフランス語を勉強します。ご存じのとおり、あそこはケベコワ（Québécois）という、普通のフランス語とはちょっと違う、古いフランス語の形が残った言語がそのまま使われていたりします。ですから、例えばケベック州の大学や高校でフランス語を学ぶといっても、そこでいわゆるフランス語を学ぶのか、ケベコワを学ぶのかというところで、どれを学ぶべきかという議論のようなものがあるというのは聞いたことがありました。

【小池】　私の場合は、大学以前は全く海外には行っていません。小学校の高学年ぐらいから外国に行きたいという夢は持っていて、初めはイギリス中世に興味を持ったのですが、中学に入ってからジャンヌ・ダルクを読んだのがきっかけで、絶対にフランス中世と決めていたのです。どちらかというと、文学よりも歴史学、美術はもっと好きだったので、高校二年生のときに中世美術が学べる大学に絞りました。

国立大学の中で中世美術専門の先生がいるお茶の水女子大学を受験し、柳宗玄先生に師事しました。先生に、「美術史を勉強するのならば、ドイツ語かフランス語かどちらかは絶対に習得しなければいけない」と言われて、学部の一年生のときからずっと、四年間通じて、哲学科で取れるフランス語以外に英文科のフランス語も受講し、週四日は大学、あとはアテネ・フランセや日仏学院に通い詰めました。

留学しなければという気持ちがあったものですから、大学院に入ってから個人レッスンを受けました。そのころ十五世紀のベルギーの美術をやると決めていたので、フラマン語の教師にも個人レッスンを受けたりして、結構いろいろな語学の勉強をしました。いよいよ博士課程後期一年生のときにブリュッセル自由大学に留学したのですが、全然使えなかった。やはり読み書きはできても、話せないということですよね。その衝撃は非常に強かった。そのときは諸々の事情で一年で帰国せざるを得なかったのですけれども、それ以降、毎年一カ月ぐらい海外に行って現地調査を行ってきました。二〇〇三年にサバティカル在外研修をとれたときに、一年間、ベルギーを拠点にして、ヨーロッパ各地の壁画の撮影を行ったので、四十三カ国ぐらいは旅している。ですから、語学というよりもやはり私の場合は美術史研究を目的としていたので、そのために語学を習得したというところでしょうか。

【黒澤】　中国語の黒澤です。僕は多分、この中だと一番、外国と縁のない世界の出身でして、僕は一般的な形での普通の留学というのをしたことはないのです。まず、中国語をやろうと思ったきっかけは短波ラジオでした。高校生の頃、父が機械やラジオが趣味でしたので、自宅に短波ラジオがありました。それを使って聞いていた北京放送の日本語放送の中に、中国語の会話教室というものがありました。それを聞いて、最後に修了証まで取りました。

これはラジオ講座ですが、修了試験があって、カセットテープに本文の課題を吹き込んで北京に送るのです。局では送られてきたテープを聞いて合否を判定して、その時の合格者の名前

が放送で発表されるのですが、「今回の合格者は、〇〇〇〇さん、〇〇〇〇さん、黒澤直道さん、以下何名です。」と放送されて、とてもうれしかったですね。そんなこともあって、大学では中国語の学科に入りました。

ただ、大学に入って、僕が卒論をご指導頂いた先生が定年間際でして、「早く修士まで終わりなさい」と言われましたので、結局、学部と修士の間は留学はできず、旅行にほんの少し行った程度です。それで博士課程に進んでから、僕は中国の少数民族のナシ族という人々を専門にしていますので、そちらのフィールドワークのために三年間現地に住んだのが、実質的に自分の初めての留学です。ですから私の場合、中国では大学に通ったことはなく、現地に住むことがその時の目的でしたので、皆さんとはやや違う方向性だと思います。

【小池】　その意味では、私も長期間、留学して習得したというわけではありません。ただ、海外では貴重な体験をたくさんできますよね。

【藤野】　スピアーズ先生は？　一番おもしろいネタを持っていそう。

【スピアーズ】　英語以外の言葉との出会いは、いつだったのかも記憶にないぐらいです。というのは、例えば、アメリカでセサミストリートが放送されていますが、その中でスペイン語が出てきます。アメリカには、とっくの昔からスペイン語圏のメキシコなど南米からの人たちが大量に来ていたわけですから、ほかの言葉にはいつでも触れる機会があるわけです。それとは別に、子供のころ、発音も何もわからないけれど漢字の意味だけを覚えていくための本を見つけて、多分百字ぐらい覚えたのかな…単漢字だけで、別に文にできたわけでもないのですが、そんなこともありました。

中学に上がると、高校の準備として、フランス語、スペイン語、ドイツ語を、数カ月ずつ体験として勉強してみましょうという授業がありました。一番興味があったのはドイツ語だったので、高校に上がるとまずドイツ語を取りました。ちょっとだけ触れた程度なので、ほとんどおぼろげにしか覚えていません。

日本語に触れたきっかけは一九九〇年代の前半あたりですが、日本からの映画などは入ってくるものの字幕も何もついていなかった時代です。そのうち字幕が入るということは考えずに、映画の内容を理解するためには言葉を覚えていったほうが早いと思いました。教えてくれる人がいないので、本屋に行って教科書を買って、自分なりに勉強しました。また、近くの短大で生涯学習講座をやっていたので通いました。独学で学んで

いる間に、少しずつ身につき始めました。

その間、ほかの言葉にも興味があったので、ロシア語の本もちょっと見てみる、ギリシャ語の本もちょっと見てみるというようなこともしていましたが、学ぶ機会はなかなかなく、触れることが多かった日本語をずっと学んでいったのです。

私の親が、どうやら私が日本関係の仕事に就きそうだと思ったようで、高校卒業後すぐに「一度、体験として日本に行ってみてはどうか」と、北九州市で数週間ホームステイをさせてくれました。

その後、大学には一応入りましたが、アメリカの大学は授業料を年額ではなく単位数で払うので、働きながら、数単位ずつ日本語の授業を取っていました。

日本の大学に入学することも可能だとわかりましたので、数年かけてお金をためながら勉強をして国際基督教大学（ＩＣＵ）に入学しました。大学で、他の言語を学ばずにほとんど日本語の古典語に専念しました。時間の使い方が間違っていたかもしれないと思うこともありますが、その後ずっと古典の世界で進んでいきました。

入学のときに日本語のプレースメントテストをやりました。その結果、私とあと四、五人が最上級のクラスに入れられました。後で聞いたのですが、先生たちはどうやら私たちに随分手を焼いていたらしい。なぜかというと、私たちは通常用意されているような授業のレベルを既にはるかに越えていたからだそうです。しかしそれが幸いして、すぐに一般の学生と同じ授業を受けることができました。

ＩＣＵは、英語で行う授業も日本語で行う授業も受けなければいけないという大学でしたが、私が受けた授業はほとんど日本語でしたので、最後に焦って英語の授業もとりました。

では、次に進めましょう。皆さん、今は何らかの言葉と深くかかわる研究等々をなさっていると思うのですが、学習体験や生活体験が、今の言葉の教え方やご自身の研究にどういう影響を及ぼしているのか、あるいはそれをどのように生かしているのかについてお話しいただきたいと思います。

【新倉】　外国語学習の体験でいいますと、私は日本とドイツでフランス語を学習したことがあります。日本では私立学校の小学校で週一回歌を歌ったりする導入程度の授業を受け、中学校では週二回、文法訳読法のフランス語がありました。その後ドイツに行ったときには、日本で受けた学習期間が評価されてフランス語の既習クラスに入れられたのですが、ついていけず、

新　倉　真　矢　子　氏

フランス語をまた一から始めたのです。

ちょうど当時、外国語を教えるには母語を媒介しない直説法（ダイレクトメソッド）がドイツでも主流で、コミュニカティブ・アプローチが教授法として浸透し始めたばかりだったようです。一時間目の授業では、大きなイラストを見せられて、「これがセーヌ川です」、「舟です」のように、場面ごとに概念と視覚情報、聴覚情報、文字を混ぜて四技能を統合し、運用力を高める授業を受けました。

【小池】　それは何年代ですか？

【新倉】　一九七〇年代前半ですね。かなり衝撃を受けたのは確かです。日本で習った自分のフランス語はドイツの学校で通用しなかったということもありますし、こういう授業の方法があるのだということを初めて体験できたということも。

このことから私のドイツ語の授業でも初級クラスでは四技能を使って場面に応じたことばを学ぶ、ということを心がけています。しかしこれはあくまでも初級クラスであって、中級クラス以上になりますとそれではちょっと効率が悪いようです。やはり日本語を介さないと言語知識の理解が十分でない。ことばを教えることは文化的背景や論理的なもののとらえ方などいろいろなものが絡み合いますので、日本語を介したほうがわかりやすい、というところは実際に自分が教えてみて分かったことです。

私は、音声学・音韻論を専門にしていますが、そのきっかけは、自分自身がいろいろな言語音を耳にして日本語の音とは違うということに気づかされたことです。またちょうど私が大学生、大学院生のころは、音韻論の新しい理論が四、五年ごとに発表された時期でもありましたので、理論的なことを扱う音韻論にも興味をもちました。

音声学では具体的な言語音を扱いますが、その背景にある言語ごとの音韻構造の違いや母語話者の知覚の違い、例えばどうして日本人は英語のｒとｌが聞き取りにくいかとか、そういう

ところに興味を持って、音声学・音韻論を専門にするようになりました。

【藤野】　音声学の話が出ましたので…。私は今、大学では発音とか発声を教えているのですが、実は音声学というのは正式に勉強したことがなくて、全部独学、本を読んだだけなのです。ただ、カナダの高校に留学したときに、私は中学校のころから合唱をやっていた縁がありまして、単位として音楽のクラスをとらなければいけなかったので、クワイヤ、つまり合唱を取りましたら、先生が黒人の先生でゴスペルだったのです。ピアノなどは全然使わずに、全部アドリブで、ピッチパイプで先生が音を出して、それに対して歌っていくような感じのゴスペルミュージックをやったのです。

そこでは、どうやって声を出すのかという非常に実地的な訓練と、あとは歌を歌うときには、とにかく子音の音というのを響かせなさいと、徹底してその先生から指導を受けました。これは、自分が留学生だからそういう指導をしたのではなくて、カナダ人の学生にも全員、歌を歌うときは子音が一番大事だということを、徹底的に指導してくださったのです。

よく日本人の話す英語というのは、聞きにくい、聞き取りにくいと言われることが多いのですが、後で考えると、自分が英語を話すときに、わりとそういうところがないのは、やはりそのときにきちんと子音というものを中心に学んだということが影響しているのかもしれません。

もう一つ、今度は大学に入ってからですが、私は演劇に興味がありましたので、もとはシェークスピアから入ったのですけれども、そこから現代劇も含めて演劇を学びました。私が通っていた学科にも演劇のクラスが多かったので、それを履修した経験が、その後、実際に発音や発生を学生に教えるときに役立っています。

【小池】　あれほどフランス語に時間を割いても、留学して全く役に立たなかった衝撃はさきほどお話ししたのですが、ベルギーの場合はバイリンガルどころではない。前を向いてフランス語、横を向いてドイツ語、後ろを向いてフラマン語を話せる人たちがたくさんいるので、そういう状況に慣れるのにものすごく時間がかかりました。

ベルギーの大学は、フラマン語の授業とフランス語の授業で校舎が分かれていて、同じ先生が行っているのです。私はフランス語のほうを受講していましたけれども、当然、ベルギーのフランス語というのはフラマン語訛りで、鼻にかかるような音を出す。パリで聞くようなフランス語よりも田舎臭い感じです。

それは後でわかったことですけれど。

そういう体験をしているうちに、一番大きかったのは交通事故を起こしたことですね。お金がなかったせいもあって、一九八一年頃の留学だったのですが、4気筒のうち3気筒が壊れている状態のフィアット・ポルスキーというポーランド製イタリア車の中古車を買って、雨が降る夜のブリュッセルの石畳で曲がり損ねて王宮に激突した。

【藤野】　王宮に？

【小池】　王宮の壁に激突です。過激派ではないかと言われて、警察で取り調べを受けたりして、それがとても語学の上達に役立ちました。とにかく説明しなくてはならない。やはり人間というのは切羽詰まるといろいろなことができるようになると実感しましたね。「過激派じゃない」とか、「意図的に王宮に突撃したわけじゃない」とか、フランス語で説明する訳です。

警察から釈放された後、今度は車の修理をしなければならなかった。一生懸命、部品の名前を勉強しましたが、自動車の修理工はアラブ系の人たちだったので、彼らもなまりがあるしこちらもなまりがあるような状態の中、とにかく2気筒は直してもらいました。ついで、それを廃棄するときにどこに捨てたらよいか人々に聞いたりして数カ月費やしましたけれども、それで上達しました。海外に住むにあたっては絶対におじけづいてはいけないということがよくわかりました。

その後ゲントでまた別の事件に巻き込まれました。あるアメリカ兵にベルギー人の恋人がいて、そのベルギー人の恋人が別のベルギー人の男とバーで飲んでいるところに、アメリカ兵が入ってきて大げんかになった。私は、ちょうどワーグナーのオペラを見た後そのバーにいたのですが、喧嘩を止めに入ったのがたまたまアルメニア人のお医者さん。英語を話せるのが私だけだったので、何とか仲裁に入りましたが、そこでまた警察に連れていかれた。それもなかなか刺激的な事件で忘れがたい。外国に住むときには、どういう態度や行動をとったらいいかが身についたと思います。

それが美術史にどのように役立っているのかというと、美術館に行って絵を見るだけではなく、各地で調査したり撮影したりするわけです。そこでは現地の人と対等にやり合えるようになりました。

その現地の文化を吸収することがいかに重要かということは、学生には教えています。しかし、今は、インターネットで画像が見られるようになってしまったので、現地体験の重要性についてなかなか伝えにくくなっていると思います。でも、や

はり文化を知るためには、その場に行き、そこの空気の中で、そこに住んでいる人たちとその文化を共有する姿勢はやはり美術解釈にも重要だと思っています。

【黒澤】　僕の場合、小池先生と通じるところは、いつもよく行っている地域が、多言語、多文化の場所なのですね。中国自体がそうですが、さらに雲南省というのは二十五種類も少数民族がいて、そのほとんどが異なる言語を話しています。漢民族の中国語（漢語）にも雲南の方言があるし、その雲南の方言にも地域ごとに少しずつ違いがあります。また、四川省から出稼ぎに来る人は四川方言を話しています。

そういう状況にあって、現地に三年間住んでいたときには、

黒　澤　直　道　氏

とにかくさまざまな言語が耳に入ってきました。その中で特に一つの言語、チベット・ビルマ系の「ナシ語」というものを、全く分からないけれどシャワーのように浴びて、特にこの最初の半年ぐらいは、なかなか苦労しました。

住んでいた場所が中国の四合院のような形式の建物なのですが、そこに一人で住んでいました。その建物の入り口のところに数人が座れる敷居があって、近所のおばあちゃんが毎日午後にひなたぼっこをするのです。井戸端会議の場になっているのですね。そこで五、六人のおばあちゃんが、毎日延々とおしゃべりをしている。この形式の建物というのは、そこで話している声が全部内側に響いて、かなり大きく聞こえるのです。中の音は外には出ないけれど、入り口のところの音は全てクリアに聞こえます。

ナシ語で、「日本人の男」というのは「ジペゾ」というのですが、おばあちゃんたちの会話をずっと聞いていると、「ジペゾがどうのこうの……」「ジペゾが、ジペゾが……」と話している。「ジペゾ」は明らかに僕のことです。でも、話の途中からだと出ていきにくいですよね。こんな感じで毎日ずっとそれを聞かされて、俺はいったい何を言われているのかとだんだん疑心暗鬼になってきました。悪口を言われているのかなと。

【小池】　男は「ゾ」なんですか。
【黒澤】　「ゾ」は接尾語で、「日本」につけると「日本の男」という意味になります。
【小池】　では「ジペ」が。
【黒澤】　「ジペ」が日本です。
【藤野】　フランス語みたい。
【黒澤】　それで、ずっと毎日聞かされて、ちょっとノイローゼぎみになって……。
【小池】　それは拷問のようですね。
【黒澤】　でも、だんだん、このいろんな音を手がかりに、何を話しているのだろうと必死で考えるようになって、もちろん自分なりに勉強もして、二〜三カ月もすると、だんだん意味が分かってきました。それで、おばあちゃんたちが何を話していたかいうと、「ジペゾは、今日何をしてるかな?」とか、「ジペゾ、今日はどこに行ったかな?」というようなことで……。
【小池】　おもしろい。
【黒澤】　あ、何だ、そんなことだったのか、と。
【藤野】　全然、大したことではなかった。
【黒澤】　そう、大したことではなく、単なるお節介というか……。
【小池】　心配していただけだった。
【黒澤】　先ほどのお話にもありましたが、現場の感覚というのはとても大事だと思うのです。しかし、教室ではなかなか現場感、臨場感というのは伝わらないですね。幾ら説明してもなかなか伝わらないので、とてももどかしさがあります。
　ところで研究の面においては、僕はナシ族を専門としていますので、ナシ語という言葉を学ぶことが直接に影響していますね。
　今日やっと一段落ついたのは、まだ誰もやっていないナシ語の地名をデータベース化する作業です。この四月から思いついて、エクセルに五〇〇ぐらい入れました。それに今の中国語（漢語）の地名と、行政区上の位置と、文献の出典を入れてまとめています。夜、時間ができた時にひたすら地図を眺めながら入力していると、以前に歩いた村や山がありありと脳裏によみがえって来まして……。四月以降仕事が辛かったので、それをやっているとすごく心が休まるんです。自分にはこれがないとちょっとやっていけないかな、と。
【小池】　空想旅行みたいなね。
【黒澤】　そう、そんな感じです。
【小池】　音声といえば、私は文字を見ていると最後まで読む

癖がありますが、現地に行ってしまうと、イントネーションとか音によって理解しているので、発音よりも、どこにアクセントを置くかがわからなかったのだと思います。日本にいると日本語がどうしても聞こえてきてしまうので、母国語をシャットアウトした空間でそちらの言語が入ってくると、どこにアクセントを置くのか、どういうイントネーションにしたら良いのかを体感できますよね。

【スピアーズ】　それを体感して欲しくて、私はほとんどの授業を全部英語でやっています。学生は意地悪されていると思っているのか、どう思っているのか。

【小池】　何年生ですか。

【スピアーズ】　一年生からです。

【小池】　すばらしい。

【スピアーズ】　しかし、私が年をとってきたせいなのか、年々学生たちの発音が我慢ならなくて修正するようになってきています。それは、私が子供のころに、母親から「きちんと丁寧に言いなさい」と仕込まれてきたことが原因でしょう。ほかの言葉を学ぶとき、フランス語でもドイツ語でも日本語でも何でも、最初のうちはしっかりと発音ができるかできないかで大きく分かれるので、それをゆっくり丁寧に教えたい。なるべくその言葉を日ごろ話している人たちの発音に近づかせていかないといけないという意識が働いています。

今となっては、英語を母語としていない人が話しているのを聞いていて「ん?」と思うこともあれば、逆に、日本語が第二言語、第三言語の人で、何かなまっているような発音を聞くと「ん?」と思ってしまう時もあるのですが。

私は音声学の専門的な知識は全くないのですが、どうしてこれがこの音になっているのかを考えると、英語と日本語の音の特性が少しずつ見えてくることもあります。随分前に気づいたのですが、例えば、日本語を母語とする人はrとlの二つの音が大の苦手です。なぜかというと、そもそも日本語に存在しない音だからです。逆に、ら行の子音は英語に存在しません。

指導している時に一つ不思議だったのは、単語がrの音で終わる「are」とか「car」とか「bar」という単語と、lで終わる「real」、「feel」という単語の最後の音の聞き分けは、学生は皆わりあいできるのです。問題は、それを最初に持ってきたときです。例えば「read」、「lead」等になると、聞き分けができないという人がかなり多いのです。

【藤野】　國學院の学生に限らず、日本人の英語学習者の多くは、例えば英語であれば子音と母音との組み合わせでできてい

るということを多分理解していないのでしょう。rだったらrの音で、単体の音というのを知らないので、それと母音が組み合わさったときに、特に日本人の場合は母音のほうに意識が寄ってしまう。ですから、最初の子音の音の区別がつかないのかなという気はします。

【スピアーズ】　それもあると思います。ですから、できるだけ指導するときは丁寧にやっているのですが、藤野さんがさっき言ったように、やはり聞き取りづらい。極端に言えば、いわゆる片仮名発音の英語に慣れていない人だと聞き取りづらいというのは現にそうです。私は慣れているので何となく言っていることがわかるのですが、慣れていない人は、全く理解できないことにまず学生に気づいてもらわなければならない。気づくというか、それではわからないよと言ってあげないといけないのです。

きちんと発音されていないと、相手に余計な苦労をかけてしまうことになります。言葉そのものに集中するはずなのが、音声から解読しなければいけない。指導のときに時々言うのですが、そのような苦労を聞き手にさせないようにするのが最低限の礼儀だと。発音は礼儀だと伝えています。

学生には、最初の最初にそこを頑張ってもらうことを求めます。やはり発音がきちんとしていれば、その後の文法などがある程度間違っていても意外とわかってもらえるのですが、発音がぐちゃぐちゃだとほんとうに何が言いたいのかさっぱりわからない。それで聞き手が諦めてしまうということになる。

【新倉】　発音指導の目標をどこにおくのか、ネイティブライクか「明瞭度」（intelligibility）か、といった議論がありますが、「明瞭度」を学習目標にすることがここ最近では主流になりつつあるようです。

英語はグローバルな言語ですし、アメリカもしくはイギリスなど、どのネイティブの発音を目標にすればよいかといった問題もあることから、話し手の意図が無理なく伝えられる程度の「明瞭度」があれば良いとされています。従って、日本人のrとlの発音明瞭度が低いと、意味を取り違えることもありますので、注意して発音指導しなければならないと思います。

ところが、英語圏は明瞭度の目安が比較的低い傾向があるのに対し、日本語やドイツ語、フランス語もそうだと思いますが、ネイティブライクに近いところまで要求されているようです。

ドイツ語圏で日本語なまりのドイツ語を話すと「外国人」というレッテルを貼られてしまうことがあります。もちろんドイツ国内でも地域差があり、方言を話すことはアイデンティティ

を保つ意味でも重要ですが、学生にはドイツのメディアで使われているような標準ドイツ語発音を目指してほしいと言っています。

先ほどの、音節の最初か最後が聞き取りやすいか、ということは逆のこともあったりもして、なかなか難しい問題ですよね。

【藤野】　逆もありますよね。

【新倉】　そうですね。そこが、まだ解明されていないところなので、研究テーマとしては非常に面白いところです。

【藤野】　さきほど、小池さんがおっしゃったイントネーションの問題なのではないかということですが、発音はもちろんなのですが、イントネーションは私も考えているところです。単体の音の発音というのができても、結局、会話の流れの中で使うときに、イントネーションがフラットなままだと、英語ではなかなか伝わらないということがあります。それは、例えばドイツ語でも一緒ですか。

【新倉】　そうですね。英語やドイツ語は強勢拍リズムの言語なので、どうしても日本人が発音すると「強さ」が足りないためにフラットに聞こえてしまう。また、逆にドイツ語や英語では文アクセント（文強勢）を残して文中の他の語アクセント（語強勢）の音響特性を少なくしますが、日本語は、語アクセントが文になっても残ってしまいます。日本人学習者は、ドイツ語に転移させて、例えば「I have a book.」にあたるドイツ語の「Ich habe ein Buch.」では、「Ich」、「habe」、「ein」「Buch」のすべての単語に日本語の高低アクセントをつけて「イ˥ヒ」「ハ˥ーン」「ブ˥ーフ」とピッチを上げたり下げたりしてしまうことがあります。本来のドイツ語では最後の「Buch」に文アクセント（文強勢）をつけるだけなのです。従って、ドイツ人が日本人のドイツ語を聞いた場合に、どこが重要なのかがわからない。全部重要なのかもしれないというようなことになって意味が伝わりづらいです。

【スピアーズ】　英語も同じです。ぽつぽつぽつぽつと話していると、言葉として耳に入ってきても、つながらないということがあります。

【小池】　私は外国語研究室に着任してから十四～五年間ほどフランス語を教えてきたのですが、教えることが私自身にとって非常に勉強になりました。手探りで始めたのですが、やはりネイティブのテープを繰り返し聞かせていました。しかし、ある時期から学生達があまりそれに関心を示さなくなった年代がありました。例えばおいしいフランス料理が食べたいからフランス語をやるだけであって、きれいなフランス語を話したいわ

けではない。目的と語学が分かれてしまった時代があったのです。そういう学生たちの関心をどうやって引き戻すのか大分苦労はしました。

外国語で一番重要なのは、わかりやすい例を出してなるべく関心を誘うことではないかと悩んでいたときに、一年生の授業で「voyage」と言ったら、一番前で寝ていた学生が「先生、それは「ボヤージュ」と言うんです、浜崎あゆみの歌です」と正されてしまいました。外国の名前をとった歌や映画がそのまま流れるようになると、片仮名表記になっていますよね。それを発音だと信じ込んでしまっている学生も、多くなったのかなという時期がありましたね。

小　池　寿　子　氏

【スピアーズ】　残念ながら、英語だとそれがことさら強いように思えます。どうしてなのかがわからないのですが、時々、学生が英語を聞いてノートをとっているのをみると、片仮名で書いていることがあります。一つ一つの音というよりも、それが脳内変換して片仮名になって出てくるということでしょうか。心配になってしまうことが実は結構多いのです。英語の音一つ一つを大切にするように指導しているのですけれど。

【黒澤】　中国語だと、さすがにそれはないように思いますね。やっぱりちゃんと書けないから。あー、でも、たまに片仮名で書いている人もいるかな……。

【藤野】　それはピンインを書いているのではなくて？

【黒澤】　いや、片仮名です。発音テストをやると、片仮名でまずメモをとっている人がいますね。ピンインが書けないから。ただ、片仮名で書いても声調は一切書けませんから、ほんとに意味が分からなくなりますよね。

【小池】　ナシ語自体は中国語？何を標準とするかは問題ですが。

【黒澤】　ナシ語はチベット・ビルマ系なので、中国語（漢語）とは根本的に別の系統です。音だけ見れば、ナシ語の方がむしろ日本語で書きやすいと思います。音節末には子音がなくて、

二重母音や三重母音が少なく、声調も非常に単純なので、片仮名でナシ語はわりと書けるというか、本当は正確には書けないのですが、多少それっぽくは書けますね。

【小池】　それこそナシ族は、ナシ語で「ナシ」と言うのですか。

【黒澤】　「ナシ」です。彼らはほぼナシ語と中国語（漢語）のバイリンガルなので、生活の中では両方使います。もっとも、ナシ語を片仮名でわりに上手く書けたとしても、それが役立つ機会はほとんどありません。せいぜい僕が使うかどうかですね。教室でナシ語をやりたいという人はまずいませんから。

【スピアーズ】　それに関連したことで、少し抽象的になるかもしれませんが、生まれる前から、おなかの中にいるころから聞いていて、そして生まれて育ってきたものを一応母語という言い方をします。それがほんとうに一〇〇％正確かどうかという問題も実はあり、家庭の言語、外での言語、家庭の中で複数の言語も存在することもしばしばあります。

一応母語という言い方を便宜上使うとして、母語と、そうではない言語と、どこかに壁があるのかないのか。と言いますのは、例えば大人になって習得した第二言語が、若干違う脳内の処理をされているとか、違うところが働いているというような研究を最近のニュースや新聞で見かけたものですから。それを実際に使ってみる、例えば留学したり研究で海外に行ったりするという体験を通じて、違うところがどこかに存在するのか、どうでしょうか。

【黒澤】　先ほどからの話にもありましたが、やはり現地に行って非常に苦労したときにそういう壁はありますよね。

【藤野】　警察の壁ではなくて、王宮の壁でもなくて。

【一同】　（笑）

【黒澤】　話が少しずれるかもしれませんが、僕が最近、一つ小さい壁を超えたのは、チベット文字が少し分かるようになったということです。分かるといってもそれほどではありませんが……。チベット語は、文字が一三〇〇年ほど前に作られたとされていて、その古い表記法をずっと今でも使っているので、文字と音声の離れ具合がものすごくて、書いても読まない文字だらけなのです。

【スピアーズ】　フランス語に少し似ているかしら。

【小池】　そうね。

【黒澤】　いろいろな子音の文字が、たくさんくっついている感じですね。正確には子音ではなく、子音と「ア」の母音が一

緒になった文字です。でもそれを読まなかったり、別の音声の変化を表していたり。

ナシ語はチベット・ビルマ系の言語なので、いつかチベット語をやらないといけないとはずっと思っていました。しかし、なかなか文字がネックになる。会話の教科書の最初のところから、イレギュラーな読み方が沢山出て来るわけです。チベット研究が専門の方ならそこを本気で勉強するのですが、僕の場合はやはりどうしても片手間なので、なかなかできなかった。

ところが、二年ほど前やはりまた仕事に疲れてしまって、授業のない学園祭の時期にふと思いついてひたすら一週間チベット文字を書いていたのです。

すると、「あれっ」と思ったらちょっと読めるようになった。チベット語は、現代語と古典語は全く違うので、まだ手をつけられるのは現代語だけですが、辞書を引き引き、やっと原書の最初の五頁ぐらい読めたのです。おそらく、チベット仏教の研究をする人は宗教への探求心がエネルギーとなってその壁を超えるでしょうし、チベット問題を考える人もそういう気持ちを持って一生懸命やりますね。僕の場合、仕事が嫌になって一生懸命書いていたら何かふっと超えた瞬間があった。

アメリカに現代チベット語のすばらしい教科書があるのですが、その教科書を取り寄せまして、今、ほぼ最後のところまで来ていて、すらすらとはいかないけれど、簡単なものなら何とか辞書を引きつつ読めるぐらいになってきました。言語によっても、壁がいろいろ違うのかなという気がしますね。

【小池】　そもそも一つでも壁を超えると、母語とまでは言わないけれども随分近しいものになりますよね。

【黒澤】　授業でよくチベット人が歌っているポップミュージックを見せていたのですが、下にチベット語の字幕がついていて、それが今までどう調べても内容が分からなかったんです。それが先週、辞書を引いてやっと意味がわかりました。授業でこういう意味だと言えるようになったので、これは良かったと思いました。やはり、チベット語で引かない限り分からなかったことなので。

【小池】　チベット語って想像ができない。

【黒澤】　その歌自体は毛織物の歌で、チベットで織る毛織物を「さあ、お兄さん、お姉さん、織りに来てください」それだけの歌ですけれど、読めない限り分からないわけですから、それは少し良かったと思っています。

【小池】　そうですね。私が師事した柳先生はロマネスク美術の専門家でした。柳宗悦の息子だったので、父親に反対してキ

リスト教美術を選んだけれども、私が入学したころはヨーロッパなんかくだらないと言い出していて、インド、東南アジアばかり旅行していたのです。インドには四回、一緒に旅行しました。古民家を訪ねたり、ビハール州では二週間ぐらい泊まり込んでミティラ・パインティングという民衆画を買い集める仕事を手伝いました。ビハール州も全然違う言葉なので、通訳のインド人は、英語とヒンディーとビハール州の言葉と四言語ぐらいを自在に操る人が同行しました。もちろん、日本語もある程度できる人です。その時に、彼は「母語は、同じインド内でも自分にとってはヒンディー語だ」と言っていましたね。

【スピアーズ】　これも母語の話に関連するのですが、高校時代に香港出身の親をもつ友達がいました。彼が子供のころは、家庭の中では広東語を話していました。ところが、友人は広東語が話せないのです。私が遊びに行ったときに、彼の親が広東語で（おそらく）「買い物をしろと言ったのに何でやらなかったんだ」と言ったところ、彼は英語で返していた。「わかった、わかった、今から行くから」と。私は彼の言葉しか聞いていないので、「じゃあ、ちょっと行こう」と彼に言われて、私が「どこに?」と聞き返さなければならなかったのです。

【小池】　親は英語を理解していた・・・?

【スピアーズ】　親は英語を理解していて話せるけれど、家庭の中では、もちろん夫婦の会話はひたすら広東語ですし、子供たちに対しても親戚に対しても広東語で話すわけです。最近調べたところ、これはごく普通の現象で、生活している地域で主流の言語を子供たちは家庭でも話すという傾向にあるのです。子供のころに家庭の言語を話していたとしても、外の言語が家庭の中に入ってきて、子供たちはそれを話します。

例えば、友人の場合、彼はほとんど広東語を話せなくなってしまった。完全に、文章をつくれなくなりました。聞いていれば全部わかるようだが、自分から話すということはできなくなった。よくある現象らしいですね。

【黒澤】　ナシ族も、若い世代になるとナシ語は分かるけれど話せないという人がとても多くなっていますが、彼らが海外に出たりすると、今度はナシ語をやろうとするのですね。中国の中なら漢語だけで過ごし、どんどんナシ語から離れていくのですが、例えば日本に来たナシ族の人が、今度はナシ語の世界に戻る、国の外に出て初めて戻ろうとするということがあるようです。

【小池】　その現象はあるかもしれない。

【新倉】　残念ながら、そのように世代ごとに使用言語が異

なっていく。若い世代は、その時代の社会の中で使われている主流の言語を使うため、少数言語はだんだんと消滅していく傾向にあることが今問題になっていますね。

【スピアーズ】　アイルランドは特にそうですし、アメリカの原住民の方々の言語も非常に危機的状況にあります。まだ話せる人がたくさん残っているところではそれを復活させて一生懸命使おうとするのですが、指導できる人が少なくなってきている。ほんとうに最後の数人だけが残っているようななかなか支援をしてもらえないところには、言語学者が行って辞書をつくり始めようとするのですが、やはり主流の社会で使われている言語に押されて日に日に消滅していってしまうということなのです。

【黒澤】　ナシ語もそうですが、結局、本人たちが気づかない限りはどうにもならないのですね。ナシ語の場合は、総人口が約三十万でナシ語の話者数はもっと少ないですが、やっと気がつき始めた段階に入っています。日本にナシ族の人が来たときに、僕の部屋に連れてくると、現地にもないナシ語の本がたくさんあるのを見て、「あっ！」と気がついてくれることもあります。日本まで来て、何で日本人がこれやっているのだろう、という。本人たちの気づきにつながらないと、それはどうにもならないのです。

【スピアーズ】　気づきも大切ですけれど、例えばアメリカでもオーストラリアでもそうでしたが、言語の使用が禁止される場合もありました。

【黒澤】　そうですね。

【スピアーズ】　たとえ十年でも禁止されてしまうと非常に打撃が大きいので、禁止が解けた現在ではどのように復活させていくのかという話もしていかないといけないだろうと思います。

【小池】　十年も禁止していると、やはり消滅する……。

【スピアーズ】　十年で一世代ですよね。使っていた人が生きていてもずっと使っていないので、もとに戻すということがなかなか大変だろうと思います。

ここで、違う話題にしてみましょう。

異なる言葉を通して、世界が違って見えるということはあるのでしょうか？

感情の表出の仕方とか、どういう思考回路で物事を捉えるのかということが、どうも英語と日本語の間で微妙に違っているように思えるのです。どちらがより論理的だという話ではなく、英語で考えている場合は、どうも私はいろいろな例外を考えて

物事を見ているような気がしているのです。それがどうしてなのかはよくわからないのですが、日本語の場合ですと、こうあるはずなのに違うのは何故だ?と、かたく物事を考えてしまう癖があるようです。

【小池】　何故でしょうね。

【スピアーズ】　よくわからないのですが、もしかすると、学習していた過程でどのような経験をしていたのかが影響している気がします。我が家では親だけが英語を使っている状況ですが、日本語で子供と接していると非常に考えがかたくなになることがあります。英語に切り替えたらもっと柔軟に考えられるように思うことがあるのです。

【藤野】　正しいかどうかはわかりませんが、言語的に英語というのは一つの事柄をあらわすのにいろいろな表現をするというか、したほうがいいと言われる言語ですよね。

【スピアーズ】　同じ意味の言葉を表現を替えて繰り返し出す。

【藤野】　そう、レペティション。いわゆる同じ言葉の繰り返しが近い文の中にあるのを極端に嫌う傾向もありますし。演説ではそれをやりますけれども、特に書き英語の中では、同じ言葉は使わない。ですから、向こうの学生はシソーラス（類義語辞典）を常に脇に置いて、一つ言葉を使ったら別の言葉で別の表現を使わなければいけないというような強迫観念にとらわれるわけですよね。

藤野敬介氏

そういう言語の中で暮らしていると、同じことをあらわしているのだけれども、別の表現、別の視点、こちらから見て、今度は左から見て、右から見て、上から見てというようなマルチプルな視点というものを常に持たなければいけないということがあると思います。

僕の中では、スピアーズさんがおっしゃった「かたくなさ」というような、視点の移動というのはあまり日本語ではないので、どうしても思い込みや感情が絡まってきます。日本語というのは、わりあい感情的な言語だという感じはします。単純に

英語が論理的で日本語が感情的だということではないのですが、やはり感情とか空気とかを大切にする文化から生まれてきている言語なので。僕の中では、表現を変えていく視点の移動というのは、英語を教えるときにはとても重要だと思いながら指導をしています。そこまで顕著なのは、ほかのヨーロッパ言語だとあまりないかもしれないですね。

【小池】　同じ言葉は近いところではなるべく使わないという原則は、フランス語でもあるけれどもそこまでではないですね。

【藤野】　英語はわりあい極端な方。時代にもよるかもしれない。

【スピアーズ】　そうですね。ただ、そっくり同じ意味の単語が英語にたくさんあるかというとそんなことはないです。ですから、小学校や中学校のときには、あまり同じ言葉を繰り返し使うのは芸がないというか、好ましくないというか、一つのものでもいろいろな視点で見るべきだと考えられています。これについては意味が近いから、まずAの言葉を使って表現して、ついでにBを使うかもしれないけれど、Cは全く関係ないから意味が近くてもそれは使わないということはあり得る。

【藤野】　ドイツ語は、どうですか。

【新倉】　ドイツ語も、同じ言葉の繰り返しを避けることは、論文や講演でもしています。しかし英語のように繰り返しを避けるための指導は、これまで受けたことはありませんね。私のドイツ語の授業でも別のことばに置き換えられたものは、学生に説明しないと全く別のものであると取り違えることが多々あります。

【藤野】　表現を変えていくということで、頭の回転のよさのようなものをひけらかす意味合いもあるのでしょうね。

【黒澤】　確かに、うちの娘がインターナショナルスクールで教わっていた教科書では、随分そういうのをやっていましたね。類義語をひたすら。

【スピアーズ】　それも、小学校のときからやります。近い意味や反対の意味を。

【黒澤】　非常にたくさんの単語を、同じコラムの中で勉強させられている感じがあります。

【スピアーズ】　そうです。もちろんひとつひとつ意味が違うのですが、どれが近い？どれが違う？という勉強はかなりやりますね。

【黒澤】　確かに、そういうのは日本語ではあまりやらないかもしれませんね。

【スピアーズ】　英語は、言語としても悪く言えば雑多ですけ

れど、大もとのゲルマン系の言語から来て、ついでに、ちょっとフランス語もふりかけてみようか、ラテン語も入れてみようか、古代ギリシャ語も入れてみようかと、いろいろまざっています。

もうひとつは、シェークスピアの功罪だと思いますが、シェークスピアが、特にラテン語系の言葉を大量につくったというのも有名な話です。現代の英語には、実はシェークスピアの演劇の中で使われたのが初見だと言われる言葉が多くあります。

確かに、古代ギリシャ語とラテン語の語頭・語尾・語幹の組み合わせで、次から次へと新しい言葉ができ上がってしまう。単語で足りれば説明的な場所に持っていくというようなこともしてしまう。例えば海の話をしようとしたら、「ocean」もあれば「sea」もあって、ついでに「a great body of water」とか「the briny deep」とか、次から次へと説明的な表現でも足していくのです。私たちは、それをやるようにと言われるのでやりますけれど。

【藤野】　ですから、ほんとうに厄介な言語を教えることになってしまったと思います。

【スピアーズ】　むしろ、フランス語あたりが良いのでは？

【藤野】　イタリア語だったら簡単なのにと思います。イタリア語はイタリア語で難しさはあるだろうけれど、そういう難しさはないですよね。例えば、「アモーレ」は「アモーレ」だし。

【小池】　そうですね。

【藤野】　ほかの、回りくどい愛情表現をあまりしなさそうでしょう？

【小池】　ストレートですよね。フランス語もいろいろテクニックがあるのだろうけれど、基本的にそこまでいろいろな言いかえは要求しない。フランス語で話している方が決断力がつく気がする。私はこう思う、こうだとまず言わないと、打ちのめされてしまうので。日本語のように、そうね、ふーんといった曖昧さは許されない世界ですから。oui かnon かはっきりしなければならない。その意味では、自分自身、随分性格が変わったかなと思います。悪いか良いかは別問題として。ですから、海外にいる自分のときのほうが、決断力があるかな。そういうことを要求される言語なのかもしれないと思いますね。

【新倉】　ドイツ語も、一説にはヨーロッパで一番の低コンテクスト言語で、その対極にある高コンテクスト言語が日本語であるためによく比較されます。私自身もドイツ語で何かを説明する場合は、日本語と違う組み立て方で発言しないと意味が伝わりにくいことは実感しています。

一度日本語とドイツ語のことばの使い方を比較したことがありました。例えば、ニュースを終えるときに日本のアナウンサーは、「ニュースをお届けしました」となる。それは、「私たち」が「視聴者のあなた方に」お届けしましたという意味で使われていますが、ドイツ語ではそういう表現はなく、「あなたはニュースを聞きました」という。主体を相手において述べていますね。

【小池】　そう、言語体系の違いというのは、実に思考体系の違いなので性格がよくわかりますよね。ドイツ語は非常にはっきりしているということですね。

【新倉】　そうですね。

【小池】　ベルギーのフランス語は、パリほどではないけれどももう少しやわらかいかな。フラマン語は、英語も若干影響していてフラマン語の影響を受けているフランス語という感じです。たまにパリに行くと、フランス人ってすごく冷たい人種だなと思ってしまうぐらい。

【藤野】　ケベック人が同じことを言っていましたよ。中国語はどうですか。置きかえとかそういうことはありますか。

【黒澤】　中国語の場合、層がいろいろあるというか、一番公式なパブリックなところから地域のそれぞれの方言や、少数民族まで広げれば民族語とかもあるから相当複雑なことになっていまして……。

【藤野】　うん、複雑そうだ。

【黒澤】　全体としては、共通語のレベルでは、日本語と比べると非常にはっきりした感じがします。もっともそれは自分の能力の問題もあって、ほんとならもっと細かい表現ができるかもしれないですけれど。

ただ、それがナシ族のようなレベルになると、パブリックなところでは共通語を使っていて、一方、私的なところではナシ語を使っているので、そちらの感覚はわりあい日本語に近いかもしれない。ナシ族は、意外に曖昧な言い方をするのですよ。曖昧な感じで表現するところは日本人に似ている。さらに表と裏が違ったりして、非常に日本人的です。

【小池】　語順的には、やはり主語が来てからですか。

【黒澤】　語順は、たまたま日本語と同じといいますか、単純に言えばＳＯＶになります。

【藤野】　チベット系の言語はそうですよね。

【黒澤】　チベット・ビルマ系はそうですね。あまり語順自体は関係ないけれど、全体的な印象としては、意外に結構細かいことをごちゃごちゃと相談するのです。彼らも多分、中国語を

使うときにははっきり表現するのかもしれないけど、ナシ語になってくると、ほんとうに「一晩、酒を酌み交わしながら相談しよう」というような。

【藤野】　日本っぽい。

【黒澤】　それで、裏ではいろいろ外国人の悪口を言ったり、漢民族の悪口を言ったり、非常に日本的。

【小池】　似ている。

【黒澤】　その後、悪口を言われていた人が戻ってくると、今度は愛想よくニコニコしていたりして、何か似ているのですね。

【小池】　昔、日本語の起源で、ネパールの近くの、何という……。

【黒澤】　レプチャ語ですか。

【小池】　レプチャ語です！日本人自体のルーツの一つがそこにあるかもしれないと言われていましたね。

【黒澤】　いろいろ混ざってはいますね。

【小池】　混ざっているのでしょうけれどね。やはり、言語体系は思考体系だと思います。その言語を使うときには見える世界が違うというのは、多分思考を自分でチェンジさせているからだろうなと。

【スピアーズ】　そんな気はしますよね。自分の中で性格なり何なり培ってきたものが、別のフィルターを通すことになるので、別の何かがそれで表出されてくるだろうという気はしますね。言語そのものというよりも。

【新倉】　世界の切り取り方が違うというか。両方の違いが感じられるのですね。

【スピアーズ】　そういう言い方もできると思いますね。

【新倉】　単語でも、やはり違ってきます。例えば、よく言われている「wear」というのは、かぶるものとか履くものとか全部を表します。ドイツ語でも「tragen」という一つの動詞で身につけるものを全部言うのですが、細かく分かれていない。「履く」、「かぶる」などに分かれていない。「ひげ」なども、全部「tragen」であらわす。「メークアップする」というのもそうですね。いかにドイツ人はそういうところにあまり感心がないかがわかるわけですよね。

【黒澤】　麺類はナシ語だと飲み物なので、ヌードルは「飲む」。

【小池】　飲むって言うの？

【黒澤】　そう、「米線（米のうどん）を食べる」は、「ミシェ・テュ」というのですが、「テュ」は「飲む」です。ちなみに「ミシェ」は漢語の「米線（ミーシェン）」の借用です。また、同じ系統のイ族という民族がいますが、彼らのイ語では果物も「飲む」ですね。

【藤野】「カレーは飲み物」のような。

【小池】カレーもそうなの？

【藤野】日本でそういうギャグがあったのですよ。「カレーは飲み物」。

【新倉】日本でも、喉越しがどうだとか言う。

【黒澤】確かにヌードルは微妙ですよね。考えてみると、飲んでいるのか食べているのか。

【小池】主食は何ですか？

【黒澤】ナシ族は、主食は米も小麦も食べます。チベットの影響もあるし、漢民族の影響もありまし、朝はバター茶と一緒にツァンパという麦焦がしも食べたり、昼は小麦か米の麺類、夜は御飯といろいろ何でも取りまぜて。

【小池】なるほどね。おもしろいですね。

【スピアーズ】ではここでテーマを変えて、ほかの言語、ほかの言葉をそもそも何で学ぶのかということについて考えたいと思います。

今回、高校の学習指導要領が改訂されて、英語教育が変わります。高校でも欧米の出版社の教材を取り入れるということを知り、学校単位で決めているのかどうかわからないのですが、コミュニケーション主体に切りかえていくようです。

それにかかわった方のお話を聞いていて、私として理解しがたいのは、日本国民全員が英語をできるようにならないと困るのかということです。どうしても引っかかってしまうところがあるのです。狭い国土なので、というのが理由のようですが、ヨーロッパのどの国よりも人口が多いじゃないですか。イギリスと比べても少なくとも三倍ですよね。アメリカの人口に比べると半分をちょっと切るぐらいかもしれないけれど、決して小さくない。

その中で日本国民一人一人を考えた場合には、いろいろな人生を歩んでいくわけです。国を挙げて海外旅行が快適にできるようにするというようなことなのか、どうしてもわからないところがあります。特に、国が文法の項目、教える順番まで決めていることが、私にとっては理解不可能な領域に入っていきます。言語学習の正反対に思えてしまう。

【藤野】シンガポールをよく例に挙げる人がいるのですが、それは全然違うと思います。国の状況が違う。シンガポールは英語がないとほんとうに生きていけない国なので、英語を中心に置くというのは絶対に必要なのです。

昔から、英語を学ぶことが幸せにつながるとか、生産性につ

ながるとか、そういう幻想のもとに英語科の学習、英語教育というものがずっと成り立ってきて、まだそれを抜けられないのかなというところから、さらに加速度を増してしまっているというのが僕の感想です。

【小池】　私も同じように思います。

【スピアーズ】　さらに不思議なのは、例えば本屋さんに洋書を普通に置いているかというとそうでもない。まちの本屋さんに、アメリカやイギリスやオーストラリアで書かれた小説が並んでいて、楽しい話がいつでも原書で読めるという状況であってもおかしくないのにそうはなっていない。テレビ番組も、英語学習のためではなくて娯楽のために英語の番組を流していてもいいぐらいなのに。

【藤野】　妄想の世界でやろうとしているのではないですか。なぜかというと、現実を見れば、人工知能、AIが出てくると、もう英語なんて機械がやってくれるわけですよ。普通のビジネスの翻訳とか通訳とかというのは、絶対にAIがやってくれるわけですよ。そうすると、仕事に役立つからというのは、はっきり言って詭弁でしかないわけですよね。テクノロジーの進歩というのを考えるとそこは難しいところです。

　では、なぜ英語をやらないといけないの？何でフランス語をやらないといけないの？ドイツ語、中国語をやらなければいけないのはなぜ？というときの見きわめはすごく難しいと思う。僕は、はっきり言ってもうその必要性はないと思っています。

【スピアーズ】　私も基本的にないと思います。

【藤野】　海外で暮らしたり、あるいは現地に行って向こうでコミュニケーションをとり続ける仕事、あるいは生活拠点を移すという人は絶対に語学をやらないといけないけれども、少なくとも日本国内にいて、英語ボランティアをやります、外資系に勤めますということであれば、これから先、別に英語ができないということが大きなディスアドバンテージにはならないような気がしています。

【スピアーズ】　今もそうだし、過去もずっとそうだった。

【藤野】　これからは、もっとそれが顕著になっていくと思います。

【スピアーズ】　アメリカの高校では、第二言語、第三言語は必修ではなくて、教養のために学びます。大学入学のためには、試験があるわけではないのですが、外国語の授業をやりました、ということが入学志願をするときに重要になってきます。外国語をとることを強制されるわけでもないし、必要のない人はやらないで過ごしてしまいます。

一方、異言語に強い抵抗があるという部分では、アメリカには異常なものがあります。アメリカには公用語というのはないのですが、英語は使っていますし、公的文章も全部英語で書かれています。デトロイトにハムトラミックというポーランド人街があって、国籍はアメリカだったり、永住権を持っていたりしますが、ポーランド語しか話せない人が大勢いるのに、英語を強制することはおかしな話です。それでも、やはり全員が英語でなければ嫌だと強く言っている人がいます。そして、別の言語が使えるということで、その人の株が少し下がるというような場合もあるといわれます。もちろんそれが良いとはとても思えないですが、逆に全員に英語を強いるのはどうか。

結果として、できる、できないということになってくると、ＴＯＥＩＣの平均点数を国際比較したときに、日本は英語をこれだけやっているのに点数が低いという話がよく出てきます。皆、英語の大切さは認識しているので、英語を選択科目にしたところで脱落していく人はそれほどいないのではないかという気はするのですが、必修科目にしているから体系化させなければいけない、という方向に頭が働いてしまう人が出てきます。

言語を、そのようにひとつの決まった体系で学習できるものかというと、それは無理です。皆が同じやり方で一つの言葉を学習できるとはとても思えない。人間はそういう簡単な生き物ではないと思うのです。

話をもとに戻さなければいけないですね。

私にとっては、外国語は教養でもあるし、少しでも触れていると自分とは違う何かを意識させられるというところもあります。英語だけが必要だという考え方は、アメリカだけが大切だという考えにつながってしまうのではないかという危機感が私にはあります。ですから、何かしらの形で異言語に触れることは大切だと思うのです。

【黒澤】　先ほどのＡＩの件ですが、確かに学ぶ目的がよく分からなくなっているという感じはあります。ただ、それでもや

（司会）スピアーズ・スコット 氏

はりナシ語はやった方がいいと思います。なぜかというと、僕はナシ族の人とは一瞬で友達になれるからです。中国語全体でも言えることですが、中国語を話せるとわりとすぐに友達になれます。さらに小さい言語であればあるほど、それを話している人たちの連帯感が強くなるので、ナシ族などは中国十三億人の中の僅かに三十万人ですから、ナシ語の単語を一個一個ネタにするだけで一～二時間の宴会は乗り切れるぐらいの使い手があります。

ところがここでＡＩを使ってしまえば、もう意味がありません。意味は通じるかも知れないけれど、そこから気持ちの繋がりは生まれ得ない。先ほどアメリカで外国語ができる人に対してマイナスに作用するというお話がありましたが、おそらくこの裏返しの問題だと思います。つまり機械には入ることのできない領域なのです。

【藤野】　実は、この状況は外国語文化学科にとってはチャンスだと思っています。今までの外国語文化学科は、どうしても「外国語」のほうが圧倒的に優勢で「文化」の方は少しおまけでつけているようなものでした。一応両輪とは言っているけれども、受講する学生も大学側の見方もそうですし、実際に教えている我々もやはり語学ということを中心に考えていたと思います。しかし、ＡＩの発展によってそこが崩れ始めていると思うのです。

今回のテーマでもありますが、「外国語を使うとは何か」と問われたときに、小池さんのお話の中で、柳先生が「美学をやるのであればフランス語かドイツ語を学ばないといけないよ」とおっしゃったことにつながってくると思うのです。今までは語学の習得が絶対的な目的としてあったのですけれども、そうではなくて、語学というものを媒介として、文化や、それこそナシ族との国際交流だってあり得るということなのです。

【スピアーズ】　単純に、友達になるということですね。

【藤野】　そういう方向へ進んでいく、そのために外国語を使うという方向に進まざるを得ないのではないかと思うのです。私は文学の専攻ですけれども、英文学は、この二十～三十年ぐらい全く使えない学問だとずっと馬鹿にされてきたわけです。潰しがきかないと言われ続けてきたのですが、もしかしたらその状況が変わってくるのではないかと思っています。

つまり、コンピューターはいろいろなことができるけれども、文学作品がつくれるかというとつくれないわけです。少なくとも、当分はつくれないでしょう。そういうところが見直されてくると、外国語文化学科もおもしろくなるのかなという気はし

ています。

【スピアーズ】　文学にも絡んでくるのですが、もう一つ、時々話題になる「共感」といいますか、つまり、相手の考えていることや感じていることを理解することがより容易にできるようになることです。自分の頭だけで生きていけなくなるというのは、決して悪いことだとは思いません。物とお金だけが「交流」するということではなく、ますます国際化が深まって人と人が接触していきます。私たちは、単にルールや規定に則って機械のように動くわけではありません。みんなが何かしら自分の人生感があって動くわけです。他者を理解するためにはやはり言葉が重要だと思いますし、違う言語を学んでいく過程の中で違う物事の捉え方が身につくのだと思います。それによって、もともと自分にはなかったものが見えてくると、ほかの人の考えていること、感じていることが理解できてくるという部分もあるのではないかと。

【藤野】　ですから、より人間性をはかるとか、人間との距離を近づけていくツールになっていくと思うのです。それは、非常におもしろい皮肉であり、皮肉だけれどおもしろい。機械というものがものすごく発展していくからこそ、逆に、そことは反対の動きが出てくると思うのです。ビジネスで機械的にできるところは機械翻訳でも良いけれど、その先に、実際に何か大きな仕事をまとめようというときには、やはり会って話さなければならない。そのとき、きちんと自分の気持ちや考えを伝えるときに、音声というのはとても重要になっていくと思います。今までとは少し別の形で、音声学というものが絡んでくる可能性はありますよね。

【新倉】　二〇〇一年の欧州議会が提唱したのが、一人の人間が母語以外に二つ外国語を勉強するという政策を打ち出しています。一つのヨーロッパに国がたくさんある中で、隣の文化、国境を超えたら全然違う文化になっているのが現状です。その文化を正しく認識し、その文化を持っている人たちとうまく正しいコミュニケーションがとれるということを目的にしていることなので、そういったところも、我々が学科で目指していることと、ある程度一致するのではないかと思っています。

【スピアーズ】　ほかの言葉を学ぶということが自分を置いて別の何かになっていってしまう。私も、学生におどし文句として「違う自分になっていくけれど、いい？」と言っています。

【小池】　むしろ、かえってほかの言語に触れると自分は何かということもよくわかってきますよね。

【藤野】　間違いなくあります。

【小池】　多様性というのは重要だと思います。

【スピアーズ】　そうだと思います。

【小池】　一人一人違ってもいいではないですか。理解し合えるというところに、何かが生まれてくるので。

【スピアーズ】　違っていても理解し合えますからね。

【藤野】　ただ、多様性という言葉自体が、今、非常に陳腐化しています。言語だったら言語というものをきちんと絡めないと、ただ単に概念だけが進んでおかしなことになってしまうと思うのです。ですから、多分、我々の言語の指導がそこに寄与することはできるのではないかと思います。ほんとうの意味の多様性というのはこういうことだというような。

【小池】　そうね。やはり言語を通じての他者理解が新しい世界観を育むと思います。

【藤野】　そうですね。大きいですよね。

【スピアーズ】　いろいろとおもしろいお話もあれば、結構広く見渡してきたものもありました。最後のところでまとまったと思います。教員として、特に学生指導で私たちは学生にたくさん望むところがあります。ほかの言葉に触れていくことがいかに重要かということも、今日のお話の中で理解できたと思います。

では、拙い司会でしたけれどこれぐらいにしておきましょう。ありがとうございました。

―― 了 ――